

援助職のリカバリー

《24》

～「セックスレス」に立ち向かう(5)～

袴田 洋子

ネットで「セックスレス」を検索してから、京子は、今までに踏み入ったことのない世界を冒険しているような気分になった。しかしながら、冒険と表現するには、かなり失礼なようにも感じた。そこには、夫婦関係に切実に悩む老若男女の声が数多く寄せられていたからである。新婚3ヶ月なのに、すでに性交渉がない夫婦。子どもが生まれてから、まったく性欲が無くなり、夫の思いに応えられないことに悩む妻、そして、その夫。配偶者からの求めにどうしても応じる気になれずに、不倫を容認すべきかどうか、真剣に悩む人もいた。京子と同じように40代後半になっての更年期障害に伴う突然の性欲増強に戸惑う女性の悩みもあった。夫婦の夜の営みに関する悩みは、多種多様だろうと思っていたが、セックスレスということでは、皆、同じ悩みを抱えているようにみえた。

こんなに多くの人たちが、同様に悩んでいると思うと、「自分だけではない」と、ありきたりなような言葉ではあるが、安心した。が、同時に、安心している場合ではないとも思った。年々増加している離婚の背景には、こんな事情がかなり影響しているのではないかとも思われたからだ。

日本は、女性が性的なもの、女性がセクシャルなことを表現することに、寛容ではない文化があるような気がする。性的なことに興味が湧く思春期や学生時代を過ぎると、女性が自分のセックスライフについて語る場所は、あまり無いように思われた。人気の海外ドラマ「セックス・アンド・ザ・シティ」では、アラフォー世代の未婚、既婚の女友達同士が、赤裸々に自分たちのセックスライフを語り合うシーンが話題となった。女性にも性欲があるということ、女性も自分の性欲を大

事にしているということが、表現されているかのようにだった。「女性には性欲がない、と考えている夫たちが多い」と、とあるサイトに書かれているのを読み、京子は、「夫たちだけではない。妻である女性自身も、自分の性欲を見ないようにしているのではないか」とも思った。少なくとも、自分はそうだった。京子は、「セックスレス」というキーワードから、今の日本の女性たちが置かれている状況を、さまざまな面で想像することが出来た。少子化という問題、セックスレスも大きく関係しているのではないだろうか。

まず、日本の家屋事情は、夫婦のセックスに不向きな気がする。2LDKや3LDKの狭さで、子どもが夜、遅くまで起きている年頃になったら、気になって夜の営みどころではないのではないか。セックスレスにならないために、「たまに夫婦でラブホテルに行き、気分を盛り上げている」というネット投稿を読み、「夫婦でいることに、努力をしているんだ」と京子は深く感心した。しかし、費用のことも考えれば、そう頻繁には、ホテルは利用できないだろう。なかなか簡単に解決できない問題だ。また、セックスに前向きになれない女性側の要因として、「痛み」があることがわかった。女性が気持ち良く感じて、膣内が濡れてく

れば、男性をスムーズに受け入れることが出来る。が、加齢に伴い、潤いにくくなってくる。そのような状況でパートナーの挿入になれば、セックスは、痛みを耐え、早く夫が射精してくれないか、願うばかりになってしまう。「セックスレス」というたった一つの言葉の検索から、想像をはるかに上回るカップルの悩みを目にして、京子は、時間の経つのも忘れて情報収集していた。そして、一つ、確かなことがあると思った。セックスについて、日本は、まったく教育が行われていないに等しいのではないかということだった。

翌日の昼休み、京子は、先輩薬剤師の一人である野口香に、自分がセックスレスについて調べていることを一気に語った。在宅で亡くなったがん患者の克彦の長男家族がきっかけになり、夫婦の在り方について考え始めたこと、更年期障害に生じる女性の性欲の高まりのこと、セックスレスに悩む夫婦が、想像以上に多いらしいということなど、医療専門職らしい理論的な仮説を交えて、勢いよく話す京子を、香は、驚いた表情で聞いていた。が、すぐに真剣な眼差しになり、じっくりと京子の研究報告に耳を傾けた。

「なので、夫婦にとって、セックスって、やっぱり大事なものだと思うんですけど、何をどうすればレスが解消

できるのかって…」と京子が、もごもごと言い淀んだ言葉にかぶせるように、香は言った。「滝沢さん、女性もセックスで気持ち良くなるよう、努力が要るのよ。男性のせいだけにしているのはダメなの。今は、潤滑ゼリーとか、女性のために真面目に考えられたグッズとか、たくさんあるのよ。」